IBDと就労

第18回　自分だけのアイテムを持て！

中山泰男

なかやまやすお●1964年生

17歳でクローン病発症。
小腸機能障害1種1級。
2001年熊本IBD設立。
現在は養護老人ホームの施設長として勤務。趣味はツーリングと全国患者会めぐり。熊本IBD会長。
九州IBDフォーラム代表。

２０１３年も就職氷河期が続くだろうとテレビが報じている。マイクを向けられた大学生が「とにかく就職したい」と不安げに答える姿が印象的だった。私たちＩＢＤ患者も、この厳しい就職戦線に否応なく巻き込まれている。

昨年、近県の患者会の依頼で、Ｔ君（24歳）と面談することになった。２年前、Ｔ君は、十数社面接し、なんとか大学の新卒枠でＩＴ企業に採用された。ところが、最初に待ち受けていたのは、新人研修と称する軍隊並みの研修であった。いわれのない罵声、連帯責任と称して数十キロのランニング。職場に配属されたあとも、毎日16時間以上の労働、上司や先輩の露骨なイジメ、時には暴力を受けた。２ヵ月後、20人いた同期は３人になっていた。ある朝、大量の下血で病院へ担ぎ込まれ、ＵＣと診断された。Ｔ君は、いわゆるブラック企業に引っかかってしまったのだ。もともと必要な社員は１～２人。大量に新人を採用し、短期間で極限まで追い込み人数を減らすのである。話を聞いていて、彼の無念さがヒシヒシと伝わってきた。病気になったのは企業の責任だと彼は言う。気持ちはわかるが、本当にそれだけだろうか？

Ｔ君の場合、退職という手段が頭になく、ドツボにはまってしまった。苦労して入った会社を辞めるか続けるか、判断する基準を持っていなかったのだ。現在の教育現場では、就職最優先で労働者の権利や退職の際の常識を教えていない。社会人として自分の身を守る手段や知識を習得する必要があるだろう。

Ｙさん（22歳）は、15歳でＣＤを発症、その時の苦い経験から管理栄養士を目指して進学した。今年、新卒者として就職活動を始めたが、履歴書へ病名を記載すべきかを悩み、提出をためらっていた。私へ相談が回ってきたのは、申込締切日の前日である。希望は地元大手の総合病院。私は、「病名を知らせて不採用になるのは、告げずに採用されて、辛い立場に立たされるよりマシだよ」と前置きし、自由記載欄か、志望動機の欄に、病名と共に「病状は安定し仕事に支障はありません」と書いてはどうか、という提案を行った。病気の経験をもとに、頑張ろうとする彼女の前向きさが伝わるだろう。電話口のＹさんの声が明るくなった。「正直に伝えてダメなら仕方がない」と腹をくくれたのは、今後の強みになるだろう。

私は19歳の頃、病気があっても収入が得られるようにと、大型車両系建設機械（パワーショベルなど）の運転免許と各種の作業主任者資格を取得した。最近の相談で感じることは、皆が皆、同じような職種や資格を目指していることだ。今の時代、大量の一般求職者との席取り合戦である。仮に病気を持つことを「弱み」とするなら、それを補う何かしらの「アイテム（強み）」を身に着けなければ、差は縮まらない。そのことを、応募や面接の前に、深刻に考えてもらいたい！

自分に自信が持てない時期は、病気を理由に、自己評価を下げて、自分を安売りして、自己嫌悪に陥ったりする。私にも経験があるが、そんな状態で就職しても、長続きはしないものだ。

就労支援は、すぐにも働けるが機会に恵まれない場合と、本人に勇気がなくて働けない場合に大別される。前者は、個人の売り込みを支援すること。後者は、遠回りでもいいから経験を積み、舞台へ上がる支援を行うことだ。どちらの場合も一番大事なことは、本人が納得しているかどうかである。状況に流されて決めるのではなく、自分で判断し、失敗しても後悔しないこと。そのためには、先輩や先生から十分な情報を聞き、社会に対する知識を深めておくことだ。当たって砕け散るのは勇気ではない。まずは意外性や自慢できることを積み上げよう。それができた時、貴方だけの個性豊かなアイテムが加わることになるだろう。